

歌劇《仮面舞踏会》 あらすじ

■第1幕

第1場 17世紀末、ボストン総督リッカルド邸の広間

リッカルドを称える将官、貴族、代議士たちの合唱。なかにはサムエル、トムら謀反を企てる一派の姿も。私室からリッカルドが登場、仮面舞踏会の招待者リストをチェックする。愛するアメーリアの名を見つけて胸の内を独白するが、彼女はリッカルドの腹心レナートの妻。すなわち報われぬ愛である。一同が去るとレナートが現われ、謀反の気配があると告げる。そこに占い師ウルリカの処罰を求めて判事が来るが、リッカルドの小姓オスカルは軽妙な弁護でウルリカの無罪を主張。リッカルドもそれに乗せられ、ウルリカを訪ねることを思いつく。大賛成のオスカルと一同、リッカルドの身を案ずるレナート、絶好の機会とほくそ笑むサムエルら謀反人―それぞれの思惑が交錯して、今夜三時に！ と約束する。

第2場 占い師ウルリカの住処

ウルリカが不気味な呪文を唱えているところに、忍び足で入ってくるリッカルドたち。ウルリカは水兵シルヴァーノの運勢を占い、やがて褒美と士官の位を手にするだろうと予言。そこでリッカルドは金と士官への辞令をこっそりシルヴァーノのポケットに入れる。占いのお代を払おうとしたシルヴァーノが金と辞令に気づき、予言が当たった！ と驚嘆する一同。そこへアメーリアが現われる。ウルリカは人払いして、彼女の恋の悩みを聞き、それをとり除くには「刑場に生える草を真夜中に摘み取らねばならない」と教える。盗み聞きしていたリッカルドは、自分もついて行こうと決意。アメーリアが去り、ウルリカが人々を引き入れ、リッカルドたちも混じる。リッカルドがウルリカに手相を見てもらうと、ウルリカはすぐ高貴な人物の手であることを見抜くが、同時に見て取った凶兆には口を閉ざす。リッカルドが臆することなく結果を問うと、「今日、最初に握手する友によって殺される」とのお告げ。一蹴するリッカルド。そこに事情を知らないレナートが遅れて到着し、リッカルドの手を握る。「彼が！」と戦慄する一同。しかしリッカルドは不吉な予言などものともしなかった。

■第2幕

真夜中、刑場のある丘

ウルリカの指示通り、刑場にやってきたアメーリア。道ならぬ思いに懊悩しているところへ、リッカルドが姿を現わし、切々と愛を口説く。アメーリアは振り切ろうとするものの、やはり思いを断ち切れず、二人は熱烈な言葉を交わす。そこへリッカルドを心配したレナートがやってきて、謀反人たちが迫っていることを告げる。リッカルドは決して女の顔を見ずに町まで送るようレナートに約束させ、その場を去る。残されたレナートたちの前にサムエルら謀反人一派が立ちはだかり、本命に逃げられたことを知った彼らは、腹いせにレナートに襲いかかろうとする。アメーリアは夫を助けようと、思わず止めに入るが、その顔を見て息をのむ一同。リッカルドと逢引きしていた女は、何と自分の妻だった！ 痛恨の呻きをあげるレナートを、サムエルたちは嘲笑う。何事かを決意したレナートは「明朝、自宅に来い」と彼らに告げる。サムエルたちは承知して笑いながら去っていく。

■第3幕

第1場 レナートの書斎

剣を手にしたレナートは、妻アメーリアの不貞をなじり、死を迫る。アメーリアはせめてひと目、我が子に会いたいと乞い、部屋を辞す。レナートは総督リッカルドの肖像に向かって、激しい憎悪とともに復讐を誓う。約束通りサムエルとトムが姿を見せると、レナートは息子の命を担保に、自分も復讐の一味に加えてほしいと願う。

出る。誰がリックアルドの命を奪うか、という算段になり、使者オスカルの到来を告げに来たアメリカを見て、彼女にくじを引かせることを思いつく。くじで選ばれたのは、レナートだった！ 自分にその役が回ってきたことを喜ぶレナート、くじを引いた自分を責めるアメリカ。そこにオスカルが現われ、夜にリックアルド邸で催される仮面舞踏会への招待を告げる。リックアルドも出席すると聞いて、これは絶好の機会と、作戦を練るレナートたち、恐怖するアメリカ、何も知らずに呑気なオスカル――それぞれの思いが錯綜する。

第2場 リックアルドの書斎

アメリカへの思いを断ち切るため、リックアルドはレナート夫妻を本国に帰すことを決意し、辞令に署名して胸元に仕舞う。華やかな舞踏会の音楽が奥から聞こえ、不吉な予感に襲われる。そこへオスカルが来て、見知らぬ女から預かった書きつけを渡す。それは「舞踏会に刺客が」という警告。しかしリックアルドは、最後に今一度アメリカに会える、と舞踏会へ向かうのだった。

第3場 豪華な大広間、仮面舞踏会

大勢の客たちの合唱。サムエルたちと落ち合ったレナートは、リックアルドの姿を探す。オスカルを捉まえてリックアルドの仮装を尋ねると、オスカルは軽やかにはぐらかすが、ついにリックアルドの衣装を漏らしてしまう。アメリカはリックアルドに忍び寄り、直ちに逃げるよう説得する。リックアルドはレナート夫妻を本国に帰すことに決めたことを告げ、今生の別れとばかり、最後の愛の二重唱を歌うが、時すでに遅し！ いつの間にか背後にまわっていたレナートが、リックアルドを短剣で突き刺す。会場が騒然となる中、瀕死のリックアルドは、アメリカの潔白と、レナート含むすべての者の無罪を宣し、胸元から辞令を出してレナートに与える。己の誤解を深く悔やむレナート、リックアルドの寛大な采配を称える一同。やがてリックアルドがこと切れると、「恐ろしい夜よ！」との叫びとともに幕が下りる。